

令和7年度

石井町高川原小学校
「学力向上実行プラン」

学校の教育目標を踏まえた学力向上の重点目標

- 自分で考え、判断し、主体的に学習に取り組む児童の育成
- ポジティブな行動支援を取り入れた授業の実践

校長

齋藤 弘人

学力向上推進員

近藤 淳子

【各校の取組状況の把握について】

管理職による授業参観や教員からの報告等、様々な機会を捉え、取組状況の把握を行う。

◎次の(1)～(3)をバランスよく取り組み、学力の向上を推進

(1)知識・技能の習得

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○教科学習や読み聞かせ等、言葉を大切にしたり取り組みを継続することで、語彙が増えつつある。 ●身に付けた知識・技能の定着や適切に使う力について、個人差が大きい。	・既習の文字や漢字の読み書き、また計算の仕方の大体を身に付けることができる。(学校アンケート80%以上) ・身に付いた個別の技能について、他の学習や生活の場面において活用することができる。	・練習問題に取り組む時間を確保するとともに、短時間でできるマス計算やミニ漢字テスト等に継続的に取り組む。 ・前学年で学習した内容や広い範囲から出題する等、定着を図るための工夫をする。 ・教員が相互に授業参観を行う。	・ミニ漢字テストやマス計算を継続し、基礎基本を徹底する。 ・板書を工夫し、ノートの書き方を徹底させることで、視覚的な理解と整理を助ける。	・ミニ漢字テストやマス計算を短時間で継続的に実施したことにより、基礎的な知識・技能の習得には一定の進展が見られた。(学校アンケート、漢字81%・計算90%) ・ノートを書く習慣や語彙の増加といった成果も見られるが、計算や漢字を生活場面で活用する力については、児童間の個人差が依然として大きく、定着度には課題が残る。	・T2や支援員と連携して個別の支援を充実させたり、ICTツールを活用して個別最適な反復学習を行ったりすることで、基礎基本の確実な定着を図る。 ・全校で統一した「板書とノートの型」による指導を徹底し、児童が自ら情報を整理し、視覚的に理解できるようにする。

(2)思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○ICTやホワイトボード等を活用しながら、表現の仕方を工夫したりお互いの考えを知ろうとしたりする姿が見られる。 ●自分の考えを自分の言葉でまとめたり伝えたりする力に課題がある。	・聞いたことや伝えたいこと・考えたことを、自分の言葉や図・表などを使ってまとめたり、表現したりできる。(学校アンケート70%以上)	・意見を集約したり考えを分かりやすく表現したりするために、適切な問い返しや板書の活用等、指導法を工夫する。 ・表現の仕方の具体例を提示するなどし、積極的に表現できるようにする。	・算数科を中心に「つかむ・考える・話し合う・振り返る」という学習過程を各教科で意識的に取り入れる。 ・児童の思考の過程(ノート)を掲示・配信することで、工夫の基準を具体的に共有する。	・「つかむ・考える・話し合う・振り返る」学習過程を重視したことで、友達の考えを参考に自分の意見をもつ姿勢が育ってきている。(学校アンケート73%) ・比較・関連付けながら意見を聞いたり、目的や意図に応じて発信したりする力について、まだまだ課題が大きい。	・思考過程を分かりやすく表現しているノートの例を具体的に共有・可視化することで、児童の表現の質を高める。 ・情報共有だけでなく、思考を深めるツールとしてのICT活用を推進する。 ・教育活動全体で言語活動を工夫・充実させ、児童の表現力・説明力の向上を図る。

(3)主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○一人一人のつぶやきには、よいものがあり、少人数の話し合いには、進んで参加しようとする姿が見られる。 ●全体で考えを交流する場では、進んで発表する児童が固定化されやすい。	・各教科の学習に意欲的に取り組み、進んで自分の意見や考えを伝えようとしている。(学校アンケート80%以上)	・問題提示の工夫や児童の問いを生かしたためあてづくりで、問題解決への意欲を高める。 ・ペア学習やグループ学習等、様々な学習形態を取り入れ、主体的に学習に取り組む意欲を高める。 ・言語環境を整えたり指導方法を工夫したりすることで、表現しようとする意欲を高める。	・話し始めの言葉や振り返りの書き出し等を提示することで、児童が対話に参加できる環境を整える。	・課題を自分事として捉え、自力解決に取り組む習慣が定着しつつあり、高学年では算数の生活活用意識が高まるなど、主体的な姿勢が育ちつつある。 ・全体共有の場では高学年を中心に未だ発言が固定化される傾向にあり、自らの学びを見直して次の学習につなげる活動にも向上の余地がある。(学校アンケート、下学年76%・上学年43%)	・「分からない」や「誤答」を学びを深めるきっかけとして価値付けの言葉かけや問いかけを工夫する。 ・自力解決から少人数のペア学習、全体共有へとつなぐ過程を日常化し、児童が自信を持って自分の考えを表現し、互いに学び合える場を構築する。